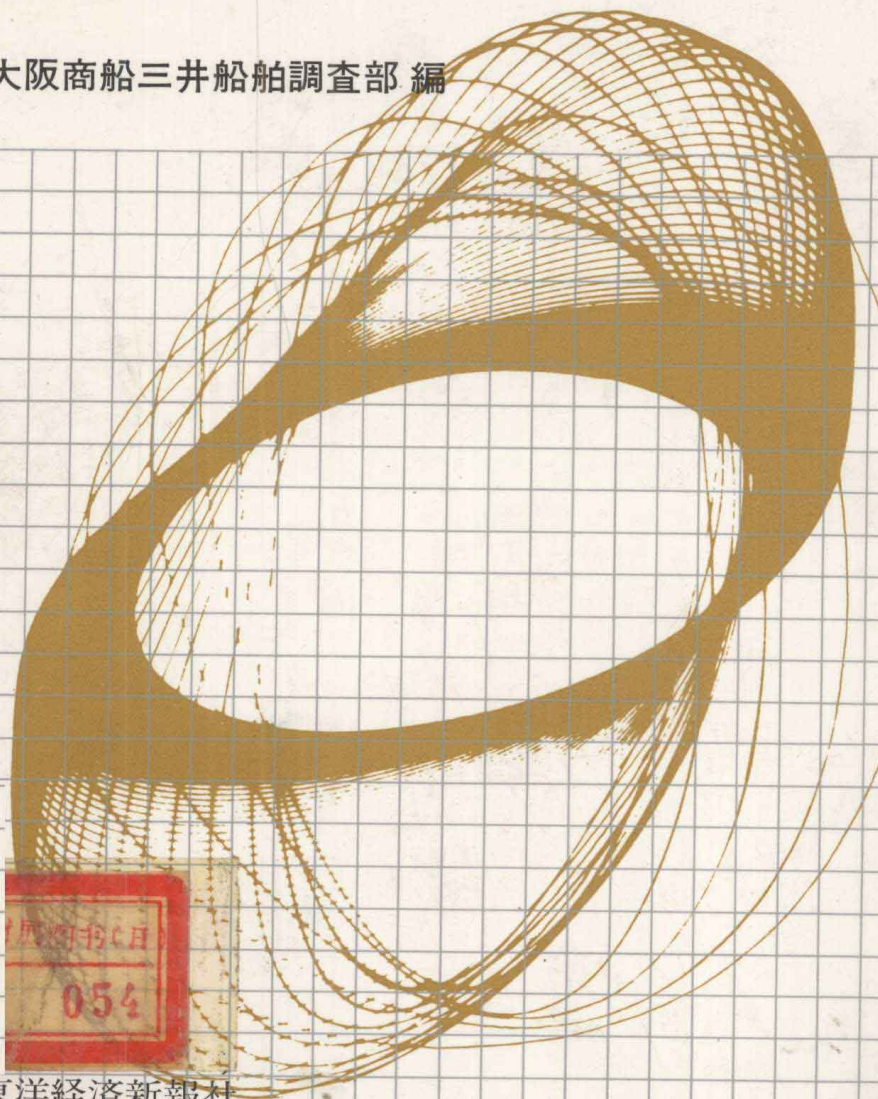


経営実務シリーズ

海運の実務

海上輸送のすべて

大阪商船三井船舶調査部 編



東洋経済新報社



経営実務シリーズ

海 運 の 実 務

海上輸送のすべて

大阪商船三井船舶調査部 編

東洋経済新報社

海運の実務

昭和51年9月24日第1刷発行

昭和55年6月15日第6刷発行

編者 大阪商船三井船舶株式会社調査部

発行者 中井義行

発行所 東京都中央区日本橋本石町1の4 東洋経済新報社

郵便番号 103 電話東京(270)代表4111 振替口座東京3-6518

© 1976 <検印省略> 落丁・乱丁本はお取替えいたします 2334-4760-5214
Printed in Japan

は し が き

わが国は消費物資の大半を輸入に頼っているほど天然資源に乏しく、基幹産業は輸入一次産品を加工して輸出する貿易形態をとるものが多く、当然のことながら、船舶による海上輸送問題がクローズ・アップされてくることになる。

戦後の急速な経済成長、なかんづく、1960年代に入ってからのも化学工業化による高度経済成長は工業材料と石油を主体とするエネルギーの輸入の急増を招き、その経済成長率は他の先進工業諸国の2倍から2倍半に達したのである。

輸入量の激増は船腹量の需要に結びつき、大量建造政策がとられた結果、わが国の主要海運各社は1973年秋のオイル・ショックまでひたすら船腹の増強に努め、その質・量、企業規模において世界でも有数のものに発展した。

しかしながら、1974年以降経済成長率がマイナスになるに及んで、鉄鋼、石油業界の業績低迷は輸出入量の激減となり、海運業の収支を極度に悪化させた。さらに過剰船腹と、数年来の船員費の高騰、海外売船と労働協約改訂に伴う予備員の増加は、日本海運の国際競争力をいっそう弱め、まさに空前の危機を迎えることになった。

それに加えて、ソ連海運の主要航路進出とか、発展途上国の自国貨物自国船積の機運の拡大等の客観情勢の変化もあり、ここに至って海運自由の原則による世界海運の秩序は崩壊寸前の様相を呈している。

このときにあたり、本書では、わが国外航海運のステイタス、輸送実態をはじめ、不況に直面する構造上の諸問題とその対応策、および一般業務の内容を主体に記述し編纂したものである。それとともに、幾多の難問題を抱えている内航海運、港湾業務にもこの機会に若干ふれておいた。

現在または近い将来多少とも海運に関連のある業種に就かれるかたがたの参考として、この発刊は時宜を得たものと考える。

また本書により海運業に対するご理解を深めていただき、今後のご協力を得られれば誠に幸甚である。

本書は大阪商船三井船舶株式会社調査部編としているが、執筆者には各業務に経験豊富な者を選定し、社内各部門の意見を徴しつつ執筆したうえ、内容について調査部が監修した。

また刊行に際しては、東洋経済新報社足達堅三氏の格別のご尽力にあずかったことに対して厚くお礼申し上げたい。

1976年 8 月

大阪商船三井船舶株式会社

代表取締役社長 永井典彦

執筆担当者

第1～3章 } 調査部調査役 勝 川 浩
第7～11章 }

第4～6章 調査部調査役 印 牧 政 男

 経営実務シリーズ

マーケティング入門	新井喜美夫著	1100円
企業分析の要点	阿部斗毛著	1100円
女子社員の管理	木下鎮夫／松本健著	950円
安全管理の実務	山崎竹吉著	1100円
新版 輸出の実務	三井物産業務本部編	1200円
新版 輸入の実務	住友商事業務本部編	1100円
セールスマンの管理	村山武久著	1000円
財務管理の要点	古川栄一著	900円
PERT入門(改訂版)	刀根 薫著	1200円
貿易の実務	森井 清著	950円
手形の基礎知識	大佐正之著	1200円
組織・権限の考え方	泉田健雄著	900円
企業内コミュニケーションの管理	小林末男著	1100円
企業内教育の手引き	岸 恒男著	1000円
PRの設計	加固三郎著	1100円
セールス・マネジャーの実務	村山武久著	1000円
顧客管理の要点	東海銀行経営相談所編	980円
職場の安全管理	盛岡英治郎著	1000円
リースの実務(増補版)	南部二三雄著	1200円
課長・係長の経営実務	加久間岩夫著	1100円
海外駐在員の養成・管理	坂元宇一郎著	950円
輸入取引の要点	中村 弘著	1200円
新版 経理実務の秘訣	元吉重成著	1100円
海外現地生産のすすめ方	茂木友三郎著	950円
海外出張	坂元宇一郎著	980円

 東洋経済新報社

資料費などの高騰により、定価を改定する場合があります。ご了承ください。

——経営実務シリーズ——

これからの労務管理	西宮輝明著	1100円
部下の育成と管理	加久間岩夫著	1100円
高人件費時代の労務改善	田川義雄著	980円
需要予測の実際	河原祐介著	1200円
商品仕入の実務	坂倉芳明／米谷浩編	1300円
会社資産投資の要点	山本清次著	1000円
リーダーシップの開発と実践	小林末男著	1100円
海外生活の精神衛生管理	近藤 裕著	950円
海運の実務	大阪商船三井船舶調査部編	1000円
専門店経営の秘訣	奥住正道著	980円
港湾の知識	港湾労働経済研究所編	1200円
経営分析の実務相談	森脇 彬著	1000円
専門店の理論と政策	中村孝士著	1100円
セールスマンの育て方	村山武久著	1000円
関連会社の管理と管理規程	勝川 浩著	1000円
経営計画の要点	中村元一著	1100円
製品戦略の実際	河原祐介著	1200円
従業員持株制度の進め方		
	山一證券持株制度部編	1400円
物流の知識	日通総合研究所編	1200円
貿易決済の実務	森井 清著	1100円
専門店・小売店の販売促進	大歳良充著	1200円
OJTの手引き	岸 恒男著	1300円
プロジェクトチームの活用と管理	中村浩治著	1200円
新製品開発の要点	日本経営計画協会編	1200円

——東洋経済新報社——

資材費などの高騰により、定価を改定する場合があります。ご了承ください。

——経営実務シリーズ——

【在庫僅少】

工場管理の要点	高仲 顕著	750円
会社規程の考え方	郷原 弘著	450円
経営情報の管理	太田文平著	450円
ビジネスマン入門	川口輝武著	450円
企業合理化の進め方	浅野行雄著	450円
職務権限のあり方	泉田健雄著	600円
企業内教育の進め方	古閑正元著	480円
職場を動かす労務管理	奥田健二著	550円
コンピュータ会計	池田善行著	700円
ビジネスマンのOR	菅波三郎著	700円
疎外と自己管理	山田雄一著	600円
改善のマネジメント	川辺勝次著	550円

——東洋経済新報社——

資材費などの高騰により、定価を改定する場合があります。ご了承ください。

目 次

は し が き

第1章 日本海運の歩み 3

第1節 歴史的背景 3

- | | |
|--------------------------|------------------|
| 1 海運とは..... 3 | 5 再び不況が..... 8 |
| 2 戦後の日本海運..... 4 | 6 三国間輸送助成..... 9 |
| 3 船舶公団と復興金
融金庫..... 5 | 7 移住船運航補助..... 9 |
| 4 朝鮮動乱以後..... 6 | 8 利子補給の復活.....10 |

第2節 海運集約10

- | | |
|----------------------------|-----------------------------|
| 1 集約の目的.....10 | 4 海運2法案に対す
る船主の動き.....12 |
| 2 企業の集約に関す
る計画.....11 | 5 6中核体のスタート...14 |
| 3 自主体制の確立に
関する計画.....12 | 6 非集約会社.....15 |

第3節 コンテナ船時代の到来15

- | | |
|-------------------------------|-------------------|
| 1 コンテナ船とコン
テナリゼーション.....15 | 2 世界経済の急変.....18 |
| | 3 好況から大不況へ.....18 |

第2章 在来定期船 22

第1節 定期船経営	22
1 定期船とは.....	22
2 海運同盟の効用.....	23
3 イギリス系同盟と アメリカ系同盟.....	23
4 運賃の決定.....	24
5 運賃プール制度.....	24
6 海運同盟の問題点.....	25
第2節 定期船の配船と集貨	25
1 就航船の決定.....	25
2 配船調整.....	26
3 スペースの割当.....	27
4 ベース・カーゴ.....	28
5 特殊カーゴ.....	28
6 Quick Despatch	29
7 集貨業務.....	29
第3節 定期船の運航採算	32
1 運航採算の算出.....	32
2 運賃.....	33
3 運航費.....	34
4 船費.....	36
5 備船料.....	37
6 運航採算の基準.....	37
7 運航採算の向上率.....	38
第4節 在来定期航路の現状	40
1 配船状況.....	40
2 航権の現状.....	42
第5節 在来船就航航路の現状	44
1 航路の概況.....	44

第3章 コンテナ船 56

第1節 コンテナ船就航航路の現状	56
1 航路整備状況.....	56
2 コンテナ船の航権.....	56
3 コンテナ輸送シス テム.....	58
4 就航船と関連同盟 主要貨物.....	61
第2節 コンテナ航路の運営	64

1 スムースな運営とは…64	7 ミニ・ランド・ブ リッジ・サービス……73
2 コンテナ船の種類……65	8 O.C.P. カーゴ……74
3 コンテナの種類……66	9 コンテナ関係機器……75
4 コンテナ船の船価……69	10 コンテナ・ターミ ナル……77
5 コンテナ船の運航 採算……71	11 海上コンテナの陸 送……82
6 コンテナのフィー ダー・サービス……72	

第4章 不定期船 84

第1節 不定期船とその貨物……84	
第2節 運送契約 ……85	
1 運送契約の種類……85	4 航海傭船契約の主 な規定条項の解説……91
2 運送契約の決め方……86	
3 航海傭船契約書……87	
第3節 各種貨物輸送 ……117	
1 鉱石の輸送……117	4 穀類の輸送……126
2 石炭の輸送……122	5 その他の貨物……131
3 木材の輸送……123	
第4節 運航採算 ……137	
1 チャーター・ペー スと係船点……137	2 不定期船の運賃……139

第5章 タンカーの経営 143

第1節 タンカーの種類と特徴 ……143	
1 タンカーの種類……143	2 タンカーの特徴……143
第2節 タンカーの営業 ……144	

1	タンカーの傭船契約……………	144	3	タンカー運賃の基準について……………	144
2	運送契約上の特徴……………	144			
第3節 タンカー傭船契約書の種類……………			150		
1	タンカー傭船契約書……………	150	2	タンカー傭船契約の特異点について……………	150

第6章 定期傭船と裸傭船 156

第1節 定期傭船……………		156	
1	定期傭船契約……………	156	標準書式について……………
2	定期傭船契約の標……………		
第2節 裸傭船……………		159	
1	裸傭船契約……………	159	2 契約の主な条項……………
第3節 その他の傭船形式……………		160	
1	運航委託契約……………	160	な特徴……………
2	運航委託契約の主……………		

第7章 船荷証券 162

1	船荷証券とは……………	162	Through B/L……………	165
2	Shipped B/L, Received B/L と L/G……………	164	4 Clean B/L と L/I……………	165
3	Direct B/L と……………		5 B/L 発行時の禁止事項……………	166

第8章 船積と本船業務, カーゴ・クレーム, 共同海損, アバndan 168

第1節 船積手続……………	168
---------------	-----

第2節 本船業務	170
1 職務分掌.....	170
2 航海当直.....	172
第3節 カーゴ・クレーム.....	173
第4節 クレームの処理	175
第5節 共同海損	177
第6節 アバndan	179

第9章 内航海運 181

第1節 内航海運の概況	181
1 就航船腹量.....	181
2 内航運賃.....	183
3 内航フルコン船.....	185
4 カーフェリーとの競合.....	186
5 海上新幹線構想.....	186
第2節 内航海運の今後	188
第3節 長距離フェリー	189

第10章 港湾業務 192

1 港湾運送事業の種類.....	192
2 海運貨物の流通過	程..... 194
3 海貨業務に関する問題点.....	196

第11章 今後の課題 198

1 現状にたって.....	198
2 余剰タンカー対策...	199
3 余剰船員対策.....	202
4 LNG 船建造	203
5 ソ連外航海運の脅威.....	206
6 今後のあり方.....	208

海 運 の 実 務

第1章 日本海運の歩み

第1節 歴史的背景

1 海運とは

海運業は貿易業に従属した一つの補助産業であったが、19世紀に入り貿易業者が自己の商売上の荷物を自分で運ぶいわゆる自己輸送(Private-carrier)からときおり他人の荷物も輸送委託を受ければ運ぶ半公共輸送(Semi-common Carrier)を経て、輸送を専業とする公共輸送(Common Carrier)に育成され、ここに海運は企業としての独立性を確立した。

今日でも、原材料を運ぶ不定期船は特定荷主の貨物を需要に応じ一括して不定期に運ぶという点からみれば自己貨物輸送の名残りともいえよう。また定期船は多くの荷主の多種類の荷物を定期的な寄港スケジュールによって輸送する典型的な公共輸送といえる。

近年原材料の大量輸送をするため、船型を大型化して長期安定運賃でコスト節減をはかり、荷主と海運業者双方の利益からつくられたのが専用船であって、これは自己輸送的な性格に逆戻りしているともいえる。事実、石油、鉄鋼業のなかには自社船を所有して運航しているところもあり、これをインダストリアル・キャリアー(In-